



生物工学研究者の進む道

生物工学研究者のキャリアパスを考える

岡澤 敦司

昨年度、広島で開催された日本生物工学会大会にて、「若手の会」の新たな試みとして、博士号取得者のキャリアパスについて、産学連携の視点から考えてみようという趣旨のシンポジウムを開催させていただいた。統計的なデータは持っていないが、ここ数年でこの手の企画がいたるところで開催されているように感じる。要するに、学会を主催したり、大学を運営したりする執行部の側においても、実社会における若手研究者のキャリアパスが曖昧模糊としていて、この世界に今まさに入ってこうとしている若者諸氏に明確なヴィジョンを示すことが困難だと感じているのだ。そういった社会的な流れの中で、本誌編集委員会においてもキャリアパスに関する話題を積極的に掲載していこうという方針が示され、本連載の企画にいたった。

当然、個々のキャリアパスは多様であり、生物工学の出身だからこれこれこういった道に進むべきだというようなモデルを示すことはできない。しかし、社会的に理系の若手研究者の職がないことが問題だと認識される状況にあるならば、何がこの状況を作り出したのかを知ることが現状打破のために必須であろう。また、生物工学という分野を築いた多くの先達がおられることは事実である。時代は変わっていくとはいえ、先輩方がどのようなことを考えて自信のキャリアパスを切り開いていったのか、また、現状をどう思っているのかを知ることが、若手研究者が自分のキャリアパスを形成していくなかで大きなヒントになるし、励まされもしよう。本連載企画ではこういった思いから、各方面の方々に若手研究者のキャリアパスについての現状解説、キャリア創生支援についての取り組み、あるいは提言について執筆をお願いした。すでに頂いている原稿からは、各執筆者の立場からトーンはさまざまであるにせよ、共通して若手研究者への思いが伝わってくる。若手への熱いエールを送って頂いたものとありがたく受け止めている。

また、本誌には *Germination* という若手の発信の場が設けられている。ここには、今まさに自身の将来へ向けて第一歩を踏み出した若手研究者の生の声が届けられている。これらの中からも本企画の趣旨に合うものを、筆者の了解を得て掲載させて頂くことになった。キャリアパス問題はとかくネガティブなイメージをもたれがちだが、実際の若手が真摯に、また、確固たる意志をもって自分の道を歩もうとしていることを感じてもらえれば幸いである。

さて、この企画の目指すところはキャリアパス問題の具体的な解決策の提示ではないと個人的には思ってい

る。まずは企業人、大学人、そして学生が共通の現状認識をもつことが現状打破の出発点となると考えている。一連のキャリアパス問題に対する社会的な動きが活発になってきたことで、やっと社会全体で理系研究者のキャリアパス問題に対する共通認識を持てる土壌が作られてきたと感じている。この共通認識に基づいた上で、個々の事例に適切に対処することで若手理系研究者の道がより明るいものとしてはっきりと見えてくることを期待している。幸い生物工学会は産学間のつながりも太く、本連載は多くの企業人の目にとまることが期待できる。学会として産学連携を考えると、修士卒はもちろんのこと、博士号取得後に企業で働く人がもっと増えてしかるべきである。このために、学生は常日頃から自分の研究が実社会にどう関わっていくかを考え、人に伝えていくことを学んでいかなければならないだろう。また、教員も企業が求めている人材像をきちんと把握し、そのための教育システムを構築したうえで、より魅力的な若手を送り出すよう努力しなければならない。企業人も専門バカは使えないと人材不足を嘆く前に、今一度、偏見を捨て、出身校なり共同研究の実施先でばりばりと働いている若手をよく観察してみたい。ダイヤの原石を発掘できる可能性はかなり高いと思っている。その後、各専門・産業分野で企業人、大学人が共通の理想的な産学連携のイメージを描くことができれば、そのイメージを具現化していくことで自ずから問題は解決されていくだろう。

学生のレベルでの意識改革はすでに始まっていると感じている。考えてみれば当然のことで、キャリアパス関連の企画を目の当たりにするたびに自分の将来に不安を感じるのは当事者である学生である。彼らはその不安を押し殺したまま教員や先輩のいいなりに動くような愚鈍な輩ではない。彼らは彼らなりのネットワークと情報収集能力を駆使し、真剣に自身のキャリアパスを模索している。現に、筆者の周囲でも博士後期課程にいらながらも前期課程の学生と同様に企業の説明会に出かけ、採用試験に臨むものが増えてきつつある。数年前にはあまり見かけない光景であった。

本連載が学生だけでなく、大学人、企業人の意識改革の契機になり、生物工学における若手のキャリアパス形成についての議論が広くわき起こってくることを期待したい。議論の中からコミュニケーションが生まれ、コミュニケーションがよりよい未来を描くことにつながるはずだと考えている。生物工学を若者にとってより魅力のある学問分野に！本連載を企画した編集委員の願いである。